

龍馬飛翔の地を訪ねる

いい風がふいちよるせよ



宝福寺：坂本龍馬像「風の夢」

坂本龍馬飛翔の地「下田」

文久2年3月、国を憂う思いから、龍馬は故郷の土佐藩を脱藩します。脱藩してからの龍馬は、捕縛の目をかいくぐり、勝海舟という人物に出会い、海舟と共に海軍操練所設立の夢を抱き、土佐の若者たちを、共に海舟の許に弟子入りをさせると、順動丸に乗って、神戸から江戸に向かいます。その時、龍馬は、脱藩浪人として「指名手配中」の身でした。



勝海舟

文久3年1月、航海中の順動丸は嵐に遭い、風待ち港の「下田」に寄航します。何とそこには、筑前福岡藩の軍艦「大鵬丸」に乗船した、前土佐藩主、山内容堂侯が率いる一行が既に下田の宝福寺に滞在をしていました。山内容堂は既に隠居の身ながら、藩の実権を握り、幕府にも物申す立場にある人物でした。容堂侯一行は、その数日前、嵐が止まない状況の中、側近で上士の乾退助（後の板垣退助）が、「何の為の蒸気船か!」という血気盛んな一言で出航しましたが、難破寸前になり、命からがらに下田へ引き返し、「鯨海酔侯（げいかいすいこう）」などと自称した容堂侯は出航できない苛立ちを抱え、お酒を飲んでいました。



山内容堂

そこに、世に聞こえる勝海舟が入港したとの知らせに、容堂侯は「勝を呼べ!」と使いを送り、坂本龍馬の脱藩を許してほしい勝は宝福寺に向かいます…。勝海舟は宝福寺で謁見をし、龍馬の脱藩赦免を願い出ます。すると、山内容堂は、「この酒を飲み干したら、その者の脱藩を許してやろう」と酒の飲めない勝に、杯に酒を注いで渡しました。酒の飲めない海舟でありましたが、龍馬の脱藩赦免がどうしても欲しい海舟は、その酒を一気に飲み干し、「勝が飲んだ!」と喜ぶ容堂侯に対し、「酒の席の約束なので、その証に、容堂様の持っておられる瓢箪を頂けますでしょうか」と懇願しました。すると、容堂は…。「この瓢箪はやれんが、代わりにこれを証とせよ。」と言って、瓢箪の絵を描いては、「歳酔三百六十回 鯨海酔侯」と白い扇に書き記し、脱藩赦免の証に海舟に手渡したとあります。龍馬脱藩が許されたその瞬間から、坂本龍馬の英雄物語が始まったのです。

「坂本龍馬飛翔の地」とする由縁はここにあります。その時、坂本龍馬は船底に隠れていたなどと言う研究家の方もいます。しかし、当時、この謁見を見守った宝福寺のご住職は、「この時、坂本龍馬なる人物が住吉楼という遊郭に待機していた。」とする、住吉楼待機の一説を残しています。（小西四郎氏の「勝海舟のすべて」という著書の中でも紹介されています）

伊豆龍馬会「下田と龍馬の関係って何ぞよ?」より

「龍馬マップ」付路線バス記念乗車券



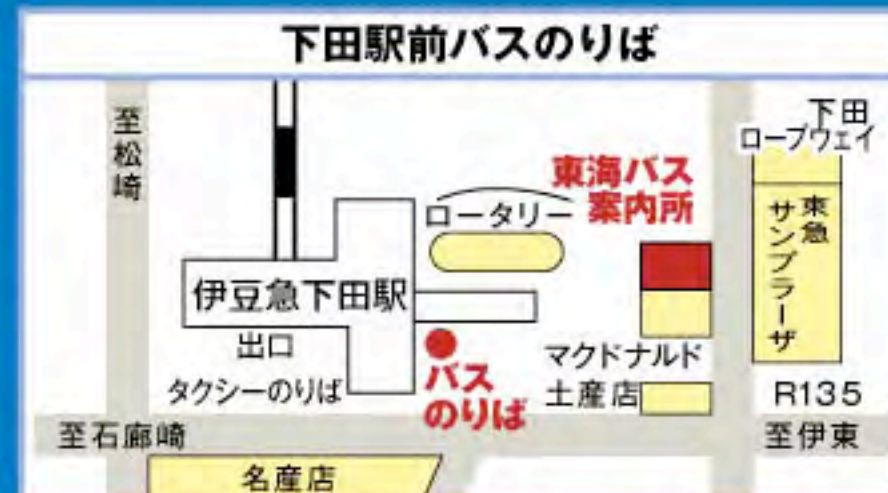
山内容堂 勝海舟謁見之寺

東海バス

伊豆 下田
坂本龍馬
記念乗車券

200円区間

2011年12月31日迄有効
途中下車前途無効



※バス時刻、乗り場等ご不明の点は下田駅前東海バス案内所にお問合せください。

東海バス下田駅前案内所
☎0558-22-2511

- 黒船を再現した下田港遊覧船「サスケハナ号」。
- 宝福寺の「謁見の間」外観。
- 宝福寺玄関にある謁見の碑。
- 「謁見の間」にある山内容堂が描いた瓢箪の絵と証文。
- 「龍馬伝」ロケ地となった下田爪木崎。

東海バス

伊豆 下田
坂本龍馬
記念乗車券

300円区間

2011年12月31日迄有効
途中下車前途無効

東海バス



赤崎 たかはし
NHK龍馬伝ロケ地
下田駅から車10分
下田駅からバス10番ポール20分
グリーンエリア前下車徒歩5分

玉泉寺
安政三年（一八五六年）タウン
セント・ハリス米國総領事
が通訳官ヒュースケンを伴
い下田に着任日本最初の
総領事館となった。
天皇、米國大統領お立ち寄
りになったお寺です。



至白浜
伊東

下田龍馬伝絵図

SHIMODA
RYOMADEN EZU

稻生沢川

- 推薦モデルコース**
- ① 上陸地
 - ② 角谷跡
 - ③ 安直楼
 - ④ 土佐屋
 - ⑤ 了仙寺
 - ⑥ 住吉楼跡
 - ⑦ 宝福寺



舞磯 まいしほ
NHK龍馬伝ロケ地
下田駅から車12分
下田駅からバス3-4番
ポール10分
吉佐美下車徒歩8分

了仙寺
安政元年（一八五四年）本堂にてペ
リー米國全權大使と林大学
頭日本全権との間で日米下
田条約13ヶ条が締結された。
黒船に関する絵画資料では
日本有数の宝物館を持つ。

下田開国博物館
黒船の遺品、日本開国の歴
史資料約千点を展示。坂本
龍馬が活躍した日本近代化
の歴史がよく分かります。

蓮台寺温泉

吉田松陰寄寓処（旧村山邸）
幕末の志士・吉田松陰は、ペリー艦隊
にて密航を企て、伊豆東海岸を下田へ
急ぎました。皮膚病を患っていた松陰
は蓮台寺温泉の医師、村山行馬郎の
治療を受けるため村山邸に滞在。当時
の姿を残す邸宅を一般公開している。

お吉ヶ淵
お吉を祀る祠は縁に囲まれ、草花が供え
られていて女性的な優しい雰囲気。新渡
戸稲造博士が建立したお吉地蔵もある。

宝福寺 山内容堂、勝海舟謁見の寺
文久三年（一八六三年）、宝福寺に風待ちで滞在する
山内容堂（後の勝海舟）のもとに、運命の嵐に導
かれ勝海舟（後の勝海舟）が坂本龍馬の脱藩
赦免を願う為に謁見した。
海舟は飲めない酒を飲み龍馬の脱藩赦免を勝ち
取り、その証の扇を賜った。ここ宝福寺は、幕末の
悲劇「唐人」と呼ばれたお吉の菩提寺、墓所でもあ
る。この謁見があった頃、龍馬は29歳、お吉は23歳。
幕末を生きた光と影がこの寺で交差している。

住吉楼跡
謁見が行われていた時、
龍馬が待っていたと言われる
住吉楼の場所。
※当時の宝福寺住職、竹岡了尊が
「住吉楼待機の二説」を残している

欠乏所跡
ここで外国船に対し欠
乏品の名目で実質上の
貿易が行われました

土佐屋
一八五四年、吉田松
陰が黒船に乗り込
もうとする数日前
に立ち寄り、兄の梅
太郎に日記を渡し
てほしいと依頼しま
したが、土佐屋の主
人が外出中で兄の
元に日記が届かなか
ったエピソード有

ペリー艦隊上陸の碑
ペリー艦隊が初めて
上陸した記念の場所
馬場ヶ崎展望台

角谷跡（船宿跡）
勝海舟が宿泊した場所
坂垣退助も宿泊した

なまこ壁
なまこ壁は、外壁に平らな瓦
を張り、その継ぎ目を漆喰に
より接着したもので、火災や
湿防虫効果に優れているこ
とから「江戸時代の土蔵な
どによく使われました。

弁天島
吉田松陰が金子重輔
と共に米國に密航す
るため小舟を漕ぎ出
した地。

ハリスの小径
タウンセント・ハリスが海岸をしばしば
散策していたという話から命名された散歩道。

まどが浜海遊公園
下田港に面した多目的広場

道の駅「開国下田みなと」
ベイ・ステージ下田
下田市観光協会

国道135号

国道136号

下田市役所

伊豆急下田駅

観光協会駅前案内所
下田ボランティアガイド協会

下田富士

稲田寺

海善寺

下田中央交番

蓮台寺駅

至河津

下田・南伊豆線

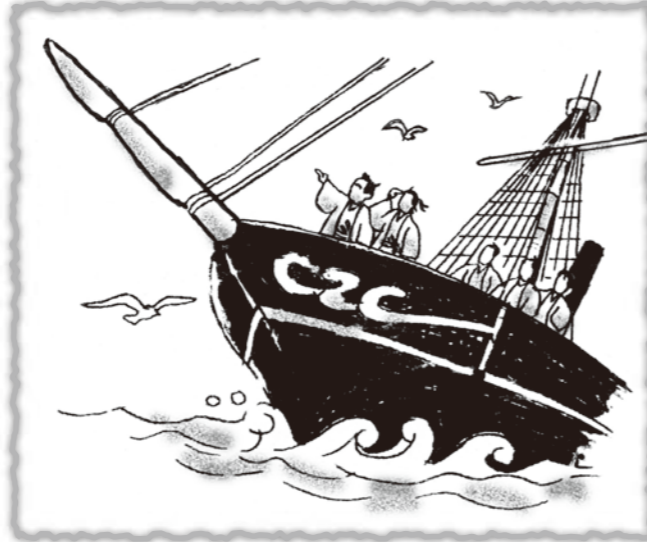
至南伊豆

1. 龍馬、海舟の弟子になる



文久2年3月、国の行く末を憂えた龍馬は土佐藩を脱藩します。そして半年後、幕臣として高名な勝海舟のもとを訪れます。地球儀を指差しながら「日本なんて小せえ、小せえ、これからは世界よ」と語る勝の大きさに龍馬は惚れ込み、そして勝もまた龍馬の柔軟な思考と魅力的な人柄に惚れ、二人は師弟の契りを交わします。

2. 龍馬のいらだち



文久3年1月、龍馬は海舟と土佐の仲間らと共に幕府の軍艦「順動丸」に乗り込み、神戸から江戸へ向けて出航します。しかし、夢にまで見た船出ではありましたが、「脱藩」という罪を背負った龍馬は勝海舟にかくまわれている身…。一日も早く勝の役に立ちたい龍馬は船の上で不自由な身の上を歎くのでした。

3. 運命の嵐



順調な航海を続けていた順動丸でしたが、突然の嵐が襲いかかります。強い雨と風に前進することもままならず、風待ち港「下田」への入港を余儀なくされるのでした。

4. 覚悟の上陸



下田港に入港した順動丸が目撃したのは、見覚えのある土佐藩「三葉柏」の家紋がはためく「大鵬丸」でした。海舟と龍馬らは下田の町に上陸したのでした。



「龍馬は下田から翔けた」



5. いぎ、宝福寺



土佐藩第15代藩主・山内容堂に招かれた海舟は高松太郎、望月亀弥太、千屋寅之助の3名を連れ滞在先の宝福寺に向かいます。海舟にはある決意(龍馬の脱藩赦免)があったのでした。

6. 龍馬、住吉楼で待つ



脱藩浪人である龍馬は「住吉楼」という遊郭で海舟らの帰りを待っていました。このときの龍馬の心中はいかばかりであったのか…。注)この時の龍馬の所在については諸説ある。これは当時の宝福寺住職竹岡了尊が残した「坂本龍馬なる人物が住吉楼で待機していた」という説に基づいている。

7. 海舟と容堂と「朱の大杯」



海舟は山内容堂に龍馬の脱藩赦免を願い出します。そこで容堂は海舟が酒を飲めないことを承知の上で朱の大杯を海舟に差し出し、酒をなみなみと注ぎ「許してほしくばこの酒を飲み干してみよ」と促します。龍馬脱藩赦免を勝ち取りたい海舟はその杯の酒を臆することなく飲み干します。そして容堂は「勝が飲んだ、勝が飲んだ」と手をたたいて喜びました。

8. 龍馬許される



海舟は大笑いする容堂をじつと見つめ、「酒席の約束事なれば、その証として容堂侯の瓢箪をいただきたい」と大胆にも容堂の酒瓢を所望します。そこで容堂は自らの白扇を取り出し「歳醉三百六十回鯨海酔候」(一年三百六十日酔っている。鯨が泳いでいる海の国の酔っ払い大名の意)とし、海舟に手渡しました。その証は、坂本龍馬と勝海舟の絆、龍馬飛翔の原点として今に伝わっています。